六朝の文学用語に関する一考察

――「杼軸」をめぐって――

福井佳夫

六朝には、それ以前になかった新語が発生していることは、もはや周知のことだろう。六朝の文人たちは、みずから発見した美や体験した感動を、ふるいことばでなく、あたらしいことばで表現しようとした。そのため六朝期には、過去になかったことばが多量に発生してきたのだった。

この新語に類したものとして、既成のことばに新意を充入した語もすくなくない。たとえば「彫虫（ちょうちゅう）」あるいは「彫虫篆刻」の語は、揚子『法言』吾子に由来し、詩文の字句を技巧的にかざるという意をもっている。ただし出典たる『法言』が、「童子は彫虫篆刻す。……壮夫は為（な）さず」と貶価的に使用していたため、この語は「過度の技巧にはしる」という不良イメージをおびていた。

ところが六朝期になると、修辞の美を重視するようになったためだろう、この語を褒めことば、つまり「巧緻な詩文をつくる」の意でも使用するようになったのである。たとえば梁の劉孝綽「昭明太子集序」では、

是以「隆儒雅之大成、握牘持筆、思若有神。
遊雕虫之小道。」

そういうわけで太子さまは儒雅の隆盛をはかり、雕虫の小道にあそばれました。牘をとり筆をもてば、文思は鬼神のごときでございました。

とつかっている。ときの皇太子の集序で「[太子さまは]雕虫の小道にあそばれました」というからには、「彫虫」の語は褒辞だと解さねばならない。このように六朝期では、ことば自体は旧来のものであっても、意味は多層になった語がすくなくないのである。[1]

本稿は、こうした新意が充入されたことばのひとつ、「杼軸」という語をとりあげる。この語、たとえば現代の小型の漢和辞典『新字源』(角川書店)では、

(1)杼は、機の横糸を通す道具。軸は、たてまき。たて糸を巻く道具。
(2)転じて、文章を組み立てること。

と解説している。あとで説明するが、(1)が元来の意で、(2)は後世に派生してきたものだ。つまり、もとは織機の道具(ひとたてまき)だったのだが、のち(六朝)になると、「文章を組み立てる」という新意がくわわったのである。

だが、「織機の道具」と「文章を組み立てる」とでは、あまりにも意味がちがいすぎる。辞典は「転じて」と説明するが、いったいどういう経緯をへて、かく含意が「転じ」てきたのだろうか。くわえて、六朝期の用例をこまかく調査してみると、(1)や(2)以外の意でつかわれた用例もすくなくない。このようにこの語は、なかなか複雑な意味変化をへてきているようだ。本稿では、この「杼軸」の語義変遷の過程を追跡し、そこに底流する文学

意識についてかんがえてみたいとおもう。

なお「杼軸」は、「杼柚」（柚と軸は音通）とかくときもある。出典の『詩経』が「杼柚」とするので（後述）、「柚」字のほうがただしいのだろうが、なぜか後世では「杼軸」とかくほうがおおいようだ。そのため、本稿では基本的に「杼軸」のほうをつかったが、引例ではあえて統一せず、原典の字のままで引用しているので、ご注意いただきたい。

一、織機

「杼軸」は、旧時ではどんな意味を有していたのか。古典語彙をおおく採録した『漢語大詞典』によって、まずその概要を紹介してみよう。すると『大詞典』では、

①織機
②紡織（→機織り［する］）
③女子紡織持家之労（→婦女［の労］）
④工商之事（→商工業）
⑤詩文的組織、構思（→詩文をつくる）
⑥営謀（→苦心する）

の六意をあげていた（いずれも原文のまま。以後は（　）中の翻訳を使用する）。これ以外に、⑦として「枢要」（猶枢要）の意をあげていたが、用例が現代のものだったので、これは略した。古典での意味としては、この六

意だとかんがえてよかろう。以下、『大詞典』の引例等を吟味していきながら、「杼軸」の［六朝以前の］意味を確認してゆこう。

まず①「織機（しょっき）」が元来の意味である。この意は、典拠である『詩経』小雅大東の

小東大東、杼柚其空。

東方の小国や大国は、杼も柚もからっぽになってしまった。

にもとづくものだ。この大東の詩は、東方の大小の国が、［周による］賦役のきびしさを嘆じたものらしい。二句目「杼柚其れ空し」とは、賦役の取りたてがきびしくて、織機の杼や柚がからっぽになったの意である。それゆえ「杼柚」は、一字一字に分解すると、織機の部品であるひとたてまきをさすのだが、二字の聯語としては織機の意となるわけだ。これが「杼軸」のもとの意味である。『大詞典』が引例としてしめす揚雄『法言』先知の、

「田畝荒、之謂穀。
杼軸空、

田畝があれ、織機がからになる。これをいやなものという。

は、そうした織機としての用例である。

つづく②「機織（はたお）り［する］」は、①の延長上に発生した意味だろう。織機という道具から、機織り［する］の意に変化したわけだ。『大詞典』は②の用例として、

［淮南子説林］「清醓之美、始於耒耜、
黼黻之美、在於杼軸。

酒のうまさは、農耕［によって穀物をみのらすこと］に依拠し、黼黻（ふふつ）（衣服のぬいとり模様）の美は、機

織りにもとづく。

［顔延之為織女贈牽牛詩］「非怨杼軸労、
　但念芳菲歇。」

機織りがいやなのではない。ただよき香りがきえるのが心配なのだ。

を提示している。『大詞典』によると、この二例は女功としての機織りではなく、ニュートラルな労働としての機織り仕事をいうのだろう。

いっぽう、③「婦女［の労］」は「女子の紡織し家を持する労」なので、つまりは女功ということになる。ただそうすると、②「機織り［する］」と実質的にかさなってくるので（機織りは女功のひとつ）、ここでは「婦女」のほうに重点があるのだろう。じっさい、『重編国語辞典修訂本』（http://dict.revised.moe.edu.tw/cbdic/index.html）は「杼軸」の意味［のひとつ］として、「旧時、男は耕し女は織る。因りて杼軸を以て妻子或いは婦女を代称せり」とのべ、「妻子或いは婦女」という項をたてている。

この③「婦女［の労］」の用例として、『大詞典』は何遜書簡をあげている。しかし、これはすこし問題があるので（後述）、ここでは私がみつけたものをあげると、

［郭祖深輿櫬詣闕上封事］今「商旅転繁、「耕夫日少、
　游食転衆、」杼軸日空。」

いまは行商人がおおくなり、渡世人がふえるいっぽうです。農耕に従事する男衆は日にすくなくなり、機織りにはげむ婦女もほとんどいなくなりました。

［王筠秋夜］「愁縈翠羽眉、長門絶往来、含情空杼軸。
　　涙満横波目。」

　愁いが翠羽の眉にかかり、涙は流し目にたまっている。長門宮に往来するひともいず、私は思慕をいだいて［婦女の］機織り仕事にも手がつかない。

などがふさわしいだろう（郭祖深と王筠は、ともに梁のひと）。はじめの例は、「杼軸」が「耕夫」（農耕に従事する男衆）の語に対するので、「紡織し家を持している婦女」の意だとかんがえられる。あとの例も、「長門」の典故（漢武帝の寵愛をうしなった陳皇后の故事）と連続するので、「杼軸」は「婦女（ここでは怨女だろう）の機織り仕事」とかんがえてよい。これを要するに、この二例は婦女（郭祖深）や婦女の労働（王筠）をさすとかんがえてよかろう（ただ②と③とは、意味的にかさなりやすい。右の顔延之の詩などは③の意でもよさそうだ）。

　つづく④の「商工業」は、婦女の仕事のニュアンスからはなれて、生業としての商工業の意だろう。そうした用例としては、

［劉陶改鑄大銭議］「良苗尽于蝗螟之口、
　　杼軸空于公私之求。」

　近年来、良質の苗は蝗螟（こうめい）にくいあらされ、紡織業も公私による誅求で壊滅してしまった。

［河東民為元淑謡］泰州河東、杼柚代春、元公至止、田疇始理。

　泰州と河東の地では、紡織業が農業にとってかわっていたが、元淑公がこの地へやってくるや、田野がたがやされるようになった。

があげられる（劉陶は後漢、元淑は北魏のひと。後者は『大詞典』の引例）。この二例中の「杼柚」は、「良苗」

や「春」（ともに農業を暗示する）と対比されている。つまり、ここの「杼軸」は、農業とことなる生業たる商工業［のなかの紡織業］の意で、使用されたものとかんがえてよかろう。

以上、『漢語大詞典』が呈示する①～④の意について、六朝までの用例を追跡し、こまかく吟味してきた。『詩経』の①織機の意からスタートし、②機織り［する］、③婦女［の労］、④商工業と意味が変化し、累加してきたわけである。こうした語義の変遷は、［たとえば「労」字における〈はたらく→ほねをおる→つかれる〉という字義の変遷などとどうよう］自然な派生や引伸のしかたであって、特段の疑問はないといってよい。

ニ、詩文をつくる

ところが、陸機「文賦」の用例において、この「杼軸」の語はおおきな変化をこうむることになった。それは、⑤「詩文をつくる」という新意が充入されたことだ。「杼軸」を⑤の意で使用することは、以前の織機や婦女［の労］からみれば、飛躍的な変化だといわねばならない。まずは『大詞典』がしめす、「文賦」の用例をみておこう。

必所擬之不殊、乃闇合乎曩篇。雖杼軸於予懷、怵佗人之我先。苟傷廉而愆義、亦雖愛而必捐。

構想が斬新でなければ、どうしても先人の作と暗合してしまいやすい。されば、自分の胸中からつくりだしたものであっても、他人がさきんじているのではないかと、気にかけておくべきだろう。かりにも［他人の作に似てしまって］廉潔さをきずつけ、道義をやぶる可能性があるならば、おしいとはおもっても、その作はすてねばならない。

この部分は、自作の詩文が他人の作と相似してしまったときの、対処方法について叙した部分である。詩文をつづりおえたあと、先人の作との類似が発覚したとき、どうすればよいか。そうしたときは、いさぎよく自分の作をボツにしてしまえ――というのが、この部分の趣旨である。こうした発言、古詩の模擬を得意とした陸機の詩風とどうかかわりあうのか、ふしぎな気もするが、いずれにせよ陸機らしい潔癖な発言だといえよう。

初唐の李善は、この二句「雖杼軸於予懐、怵佗人之我先」に対し、

杼軸、以織喩也。雖出自己情、懼佗人先己也。毛詩曰、杼軸其空。

ここの「杼軸」というのは、機織りで創作をたとえたものである。［この二句は］詩文を自分の胸中からつくりだしたとしても、他人が自分にさきんじているのではないかと心配すべきだ［の意である］。『毛詩』に「杼や柚がからっぽになった」とある。

と注している。これによると李善は、「杼軸」で「詩文をつくる」の意としたのは、比喩的表現なのだという。そして原文の「予が懐いより杼軸すと雖も」を「自己の情より出ずると雖も」といいかえ、「杼軸」を「出」（つくりだす、の意）字におきかえている。つまり「杼軸」の二字を、［織機りして布を］おりなす →［自分の胸中から詩文を］つくりだす」という比喩的表現だと解したのだろう。そして、大東の「杼軸其空」（杼や柚がからっぽになった、の意）をひいて、典拠を明示したのである。これを要するに李善は、「杼」「柚」は織機の部品だったが、陸機はそれを比喩的に、「機織りする →［布をおりなすように］詩文をつくる」と転じさせて使用した――と解したのだろう。

こうした陸機の創意工夫［と李善の解釈］は、現代の我われも理解できなくはない。織機から布をおりなすことと、胸中から詩文をつくりだすこととは、具体と抽象とのちがいこそあれ、似ていなくもないからだ。それこ

そが陸機の独創だったといわれれば、そんな気もしないではない。

しかしそうはいっても、やはり機織りと詩文創作とのあいだには、おおきな距離があるとせねばならない。いくら才気あふれた陸機であっても、「機織りする」の意を「詩文をつくる」の意に変化させるには、［比喩的表現だったとしても］そうとうの思念の飛躍が必要だったはずだ。いったい陸機はなぜ、こんな卓抜な飛躍をおもいついたのだろうか[2]。

そうした疑問をもちつつ、陸機以前の文献をみわたしてみた。すると、機織りと詩文創作を関連させることは、じつは「文賦」以外でもおこなわれていたのである。まず、陸機と同時期の文献からしめせば、

有問秀才、「呉旧姓何如」。答曰、「……陸士衡士龍、鴻鵠之裘回、懸鼓之待槌。凡此諸君……以談論為英華、以忠恕為珍宝、著文章為錦繡、蘊五経為繒帛」。

あるひとが秀才（蔡洪）にたずねた。「呉の名族にはどんな人物がおりますか」と。すると彼はこたえた。

「……陸機陸雲の兄弟は、大空をまう鴻鵠、ばちをまつ太鼓です。彼らはみな……談論を名誉とし、忠恕を珍宝とし、詩文をつづっては錦繡（美麗な織物）をつくり、五経をまなんで絹織物をつくっています」。

という用例がある（『世説新語』賞誉）。これは、呉の逸才をたずねられた蔡洪が、陸機兄弟らの名をあげつつ、その才能をたたえたものだ。そこで蔡洪は陸機らを、「詩文をつづっては錦繡（きんしゅう）（美麗な織物）をつく」っていると称賛している。ここでも「文章」と「錦繡」（広義の「機織り」にふくまれる）とを、関連させていることに注意しよう。

この種の話はあちこちにみつかるが、時代をさかのぼってゆくうちに、陸機の時代から約四百五十年まえ、前漢の司馬相如に関するエピソードにぶつかった。この司馬相如は周知のように、漢代、いや歴代をとおしても、

屈指の腕前をほこった賦の大家である。その相如に関し、つぎのような話柄がつたわっている。それは、

其友人盛覧字長通、牂牁名士。嘗問以作賦。相如曰、「合綦組以成文、列錦繡而為質。一経一緯、一宮一商。此賦之跡也。賦家之心、苞括宇宙、総覧人物。斯乃得之於内、不可得而伝」。覧乃作合組歌列錦賦。

司馬相如の友人の盛覧、あざなは長通は牂牁（そうか）郡の名士だった。彼はあるとき、司馬相如に賦の作りかたをたずねた。すると相如はいった。「くみひもをあわせて模様（文飾）をつくり、錦繡をつらねて生地（内容）とする。たて糸をとおせば、つぎはよこ糸をとおす。またある字を宮の音にすれば、つぎは商の音とする。これが賦の作りかただよ。賦家の精神は、宇宙をつつみこみ、人や事物のありようをみとおさねばならない。こうした作りかたは自分では心で理解できても、他人にはつたえにくいものだ」。盛覧はそこで「合組歌」と「列錦賦」をつくったのである。

というものだ（『西京雑記』巻二）。友人の盛覧から賦の作りかたをたずねられた相如は、「くみひもをあわせて模様をつくり、錦繡をつらねて生地とする。たて糸をとおせば、つぎはよこ糸をとおす。……これが賦の作りかただよ」とかたったという。これによって、機織りと詩文創作を関連させる発想は、司馬相如のころから存在していたことが推測できるのである（相如の発言をきいた盛覧は、合組歌と列錦賦をつくったという。これも機織りと創作の関係を暗示するものだろう）。

この話柄で注目したいのは、「たて糸をとおせば、つぎはよこ糸をとおす」という発言だろう。糸をたてに、つぎはよこにと、こもごもおりなして、あざやかな模様の布地をおりあげてゆく。相如は、こうしたひと織りひと織りの積みかさねを、一字また一字と字句を布置してゆく賦作になぞらえたのである。さきにみた『淮南子』説林にも、「黼黻の美は、機織りの仕事にもとづく」とあったように、機織りと創作とのあいだには、「辛苦して

美をつくりあげる」という共通点が存在している。その意味で、相如がこの両者を関連づけたのは、それほど意外な組みあわせではなかっただろう。こうみてくれば、「文賦」における「杼軸＝詩文をつくる」の用法には、それなりの前史があったといってよかろう。

この話をのせた『西京雑記』は、前漢の劉歆の撰とされたり、［陸機と同時代の］葛洪の編とされたりして、いささか素性に問題がある書物である。その意味で、右の司馬相如のことばも、真に彼がかたったものかどうか不安がないではない。ただ同書の記事自体は、前漢の長安周辺の出来事をたんねんに収集したものであり、すべてが作りばなしだとはいえない。それゆえ、文学の創作を機織りに比擬しがちな話柄としてなら、この話は信用してもさしつかえなかろう。

三、苦心する

「文賦」で使用された⑤「詩文をつくる」意の「杼軸」は、それ以後の文学論で一種の流行語となったようだ。六朝の文人たちは、しばしばこの語をつかって文学論を展開している。以下、それを紹介しよう。

はじめは沈約。彼は『宋書』巻十一の「志序」において、

毎含毫握簡、杼軸忘飧、終亦不足与［班左並馳、董南斉轡］。

いつも紙筆を手にとっていて、文をつづろうとしては食事もわすれてしまうほどだ。それでも、けっきょくは班固や左丘明とならび、董狐や南史とおなじというわけにはいかない。

とつづっている（『大詞典』もひく）。拙著『六朝文評価の研究』の第三章でも言及しておいたが、沈約は「文賦」をよく研究していたようで、彼の『宋書』の「謝霊運伝論」でも「文賦」の語彙をたくさん利用していた。ここの「志序」中の「杼軸」使用も、そうした「文賦」研究の成果だとしてよかろう。

つぎは劉勰の『文心雕龍』である。二箇所つかっていて、まず書記篇に、

観「史遷之報任安、……、並「杼軸乎尺素、
　「東方之難公孫、　　「抑揚乎寸心。

司馬遷の「報任安書」や東方朔の「難公孫弘書」……などをみると、いずれも尺書に心情をかきつらね、胸中に多様な思いを抑揚させている。

とある。ここの「杼軸乎尺素」を直訳すると、「一寸の白絹のうえに文辞（書簡の内容）をつづる」となろう。つまり「詩文をつづる」意である。もうひとつは神思篇で、

視布於麻、雖云未貴、杼軸献功、煥然乃珍。

麻布を麻糸をくらべたなら、麻糸は高価とはいえぬが、それでも麻糸を機にかけて織りあげれば（＝詩文をつくれば）、すばらしい珍奇な織物（＝詩文）となるだろう。

と使用している。ここの「杼軸」は、②「機織り［する］」の意と⑤「詩文をつづる」の意とを掛詞ふうにつかっているようだ。それゆえ「杼軸献功」は、「機織りして布を織りあげる」の意でもあるし、また「詩文をつづって完成させる」の意でもあることになる。その意味で、なかなかこった表現だといってよかろう。

ついでながら、劉勰の恩師というべき、僧祐の文章もあげておこう。それは、

［続撰失訳雑経録］祐所以「杼軸於尋訪、
崎嶇於纂録也。」

そこでわたくし僧祐は、調査した結果を文章にまとめ、集録した経典を考究しました。

というものだ（これも劉勰の代作かもしれない）。ここでも、やはり「杼軸」は「詩文をつくる」の意で使用されている。

つづいては、梁の蕭兄弟の用例。まず兄の蕭統は「同泰僧正講詩」序において、

余自法席既闌、便思和寂。「杼軸二年、
濡翰両器。」

余は法席がさかんになったころから、寂滅楽に和した詩をつくろうとおもっていた。かくして想をねること二年、筆に二瓶もの墨汁をしめらせてきたのである。

とつかっている。おなじく弟の蕭綱は「登城」詩において、

日影半東簷、靖念空杼柚。「小堂倦縹書。
華池厭修竹。」

陽差しが東の軒に半分ほどかかってきたが、いくら思いをこらしても詩文がつくれない。小部屋での読書にもあき、池端で修竹をみるのもいやになった。

と、やはり「杼軸」を詩文をつづるの意で使用している。

さらに注目したいのは、蕭統は「杼軸」を⑤「詩文をつづる」だけでなく、より一般的な⑥「苦心する」の意でも使用していることである。そもそも詩文をつづるのは、創作に「苦心する」ということでもある。その意味

で、「詩文をつづる」から「苦心する」意への引申は、自然なものだったろう。蕭統はそうした⑥の意の「杼軸」も、彼の文章で使用しているのである。すなわち「与何胤書」に、

但経途千里、眇焉莫因。何嘗不「夢姑胥而鬱陶、心往形留、於茲有年載矣。
想具区而杼柚。」

千里もはなれていますので、お会いできる機会もありません。［貴兄のお住まいの］姑胥山を夢みては心が鬱々とならぬことなく、また具区の沢を想起しては［お会いすべく］苦心してきたのです。でも［お会いしたいと］心ははやっても、身体は移動できぬまま、今日まで何年もたってしまいました。

という一節がある。ここの「杼軸」は、対偶中で「鬱陶」（欝々とする、の意）の語と対応しているのに注意しよう。すると、「詩文をつづる」の意ではなく、「あれこれ［お会いする方法を］かんがえる　→　［お会いすべく］苦心する」の意だと解さねばならない。

なお、この⑥の意は一見すると、②「機織りする」の意から［「文賦」における⑤の意をへずに］、直接に「心中でこもごも織りなす」の意に転じ、そして⑥「苦心する」へ変化してきたのだとおもわれなくもない。しかし「苦心する」の意の用例は、「文賦」よりおくれて出現するので、「機織りする　→　心中でこもごも織りなす　→　苦心する」という順序でなく、「機織りする　→　詩文をつくる　→　［詩文だけでなく、他の方面でも］苦心する」という経過をたどったのだと推測される。それゆえこの⑥の意も、「文賦」に由来するものとかんがえるべきだろう。

この⑥「苦心する」意の用例を、二例ほど提示しておこう。一例目は斉の謝朓「酬徳賦」中の、

「意搔搔以杼柚、
魂営営而馳騖。」

気があせってはあれこれ思いをめぐらし、わが魂も落ちつかずとびださんばかりです。

という用例である。この二句は、自分の気分が動揺してやまないことを叙したものだ。ここの「杼柚」は、織機の杼と軸とが回転してやまぬように、私の心もあれやこれや思いをめぐらしつづけている、のニュアンスだろう。

二例目はやはり斉の王倹「高帝哀策文」である。そこで斉高帝の仁徳ぶりをたたえて、

乃眷斯民、昧旦杼軸、興文偃武、纘禹旧服。

［高帝さまは］民衆のほうをふりかえり、早朝からあれこれ心配し、文事をさかんにし武事をひかえて、禹王の領土を継承しようとされました。

とつづっている。ここでは、高帝さまが民衆のことを「あれこれ心配される」という意で、「杼軸」の語を使用している。このように六朝後期の「杼軸」には、［詩文をつづる苦心さとはことなる、一般的な意の］⑥「苦心する」という新意が充入されているのである。

四、うつろ

さて、『詩経』小雅大東に由来する「杼軸」について、『漢語大詞典』にもとづきながら、その六つの意味を吟味してきた。ここまでの議論をまとめると、「杼軸」はもとは織機の部品の意であった。それがやがて、①「織機」を意味するようになり、また②「機織り［する］」の意に引申してきた。さらに③「婦女［の労］」や④「商

工業」の意も生じてきたが、ここらあたりまでは、典拠での用法にちかく、派生の道すじもわかりやすいものだった。ところが「文賦」以降、⑤「詩文をつくる」や⑥「苦心する」の意がうまれてき、これらは典拠からそうとう飛躍した意味であった――ということになろう。

この種の、ことば自体は旧来のものであっても、新意が充入された語は、六朝文学ではすくなくない。当時の文人たちは、そうした新意の充入を了解したうえで、当該の語句や詩文を読解していた（また、自分もそうした語を使用していた）のだろう。それゆえ、たとえば「杼軸」の①～④の意ぐらいだったら、それほどおおきな誤解は生じなかったろうとおもわれる。ところが⑤や⑥ともなると、［意味的飛躍がおおきいので］そうとう難解にうつったはずで、当時の人びとを困惑させたのではあるまいか。初唐の李善が、「杼軸は織を以て喩えしなり」云々と注をほどこしたのも、それが難解な表現だったからだろう。

ところで「杼軸」の語には、当時の読者を困惑させたとおもわれる、もうひとつの難解な意味がある。それは、「うつろ」や「からっぽ」の意味だ。後述するように、この意をもった用例は、六朝の詩文にたくさん存在している。それなのになぜか、各種の漢語辞典はもとより、古典語彙をたくさん採取した『漢語大詞典』にも、立項されていないのである。

その代表的な用例が、何遜の「為衡山侯与婦書」中のものだ（この用例は、日本では後掲の岡村繁氏の御論によって、ひろくしられている）。何遜のこの作は、標題にもあるように、何遜が衡山侯こと蕭恭のために、その妻（正妻かどうかは不明）への書簡を代作したものである。つまり他人の妻への、書簡の代作（しかもその夫のために）なのだ。しかもその内容たるや、［夫から妻への］あつい恋情をかたったもので、恋文としかいいようのない代物なのである。他人の妻への恋文を、その夫のために代作することなど、ふつうの感覚ではありえない

だろう。だが当時はそうした奇妙な恋文代作が、遊戯的におこなわれていたようなのである。

そうした何遜の代作書簡の概要を紹介すると、

あなた（蕭恭の妻）は洛水や陽台の神女にもまけぬほどうつくしい。寝室のとばりのまえでほほえんでいたその笑顔は、いまも私（蕭恭）の心のなかにやきついている。私はずっと、そんなあなたの面影をおっかけていたので、すっかりくたびれてしまった。かくして私のあつき思いは、夜どおしもえつづけ、朝までやむことはなかった。あなたはすぐ傍にいるはずなのに、その可憐な姿をみることができぬ。私の心はまさに、一日あわねば三秋のごとしだよ。いまこの手紙で私の思いをのべてみたが、これしきではとうていのべつくせないほどだ。

というものである。何遜は、こうした綿々とした恋情を［夫に代わって他人の妻に］叙したあと、その書簡をつぎのようにむすんでいる。それが、「杼軸」の語を使用した、

遲枉瓊瑤、慰其杼軸。

という二句なのである。

この結び二句は、六朝美文の精緻な技巧を凝縮した、まさに雕虫篆刻（褒辞でも貶辞でも可）の表現だといってよかろう。二句とも解釈困難だが、なかでも後句の「杼軸」の解釈がむつかしい。私は、ここの「杼軸」は［右でのべたように］、「うつろ」「からっぽ」の意で解してよいとおもうが（後述）、研究者のあいだには、なおいろんな議論があって、現在でもまだ定説にはいたっていないようだ。そこで以下、「杼軸」の解釈を中心に、この結び二句の読解をかんがえてみよう。

まず「杼軸」にふれるまえに、前句中の「瓊瑤（けいよう）」の語を解説しておこう。この「瓊瑤」も難解ではあるが、こ

の語に対しては、どの研究者もおなじ解釈をしている。すなわち、この語は『詩経』衛風木瓜の「投我以木瓜、報之以瓊琚」（あの娘は私に木瓜をなげてくれた。私は宝石をお返ししよう、の意）をふまえたもので、ほんらいは宝石の意であった。ところが、ここで何遜はヒネった典故利用をおこなって、「瓊瑤」を宝石の意でなく、直前の「報之」二字、つまり「お返しする　↓　返書」の意で使用しているのである。したがって「瓊瑤」は、「返書」の意になる。こうしたヒネった典故利用をしたことばを、現代の研究者は断語と称したりしているが、この「瓊瑤」はまさにそれに相当するわけだ（断語の詳細については、鈴木虎雄『駢文史序説』〈研文出版〉一六一～一六八頁を参照）。

だが、「遲枉瓊瑤、慰其杼軸」二句でむつかしいのは、この「瓊瑤」だけではない。ほかにも、前句の「遲」をどう解釈するのか。「枉」はだれが「まげて……する」のか。後句の「慰」とは、だれがなにをなぐさめるのか。そして本稿が注目する「杼軸」をどう解するのか――なども至難である。それゆえ、現代の研究者たちの理解のしかたもさまざまだ。以下、私の目にふれた二句の解釈を、刊行がはやい順に提示してみよう。すると、つぎのような六通りとなった。それは、

㈠［中国文化叢書4岡村繁駢文］遲つ瓊瑤を枉げて、其の杼軸をも慰めんことを。

私は待ち遠しい、そなたが返書をよこしてくれて、私ばかりか、そなたの今のうつろな気持をも慰めてくれるのが……。

＊［私とあなたの］うつろ［な気持］

㈡［張仁青歴代駢文選］瓊瑤を枉げ、其の杼軸を慰むるを遲つ。

私は、あなた（妻）がまげて返書をくれ、私の［あれこれ思いなやむ］苦衷をなぐさめてくれることをまっ

ている。

＊⑥の意。［私のあれこれ思いなやむ］苦衷

㈢［韋鳳娟魏晋南北朝諸家散文選］瓊瑤を枉ぐるを遅つ。其の杼軸を慰めん。

あなた（妻）がまげて私に返書をおくってくれますように。そしてこの私の手紙があなたをなぐさめることができますように。

＊③の意。あなた（妻）

㈣［曹明綱六朝文絜訳注］瓊瑤を枉ぐるを遅くすれども、其の杼軸を慰めん。

あなた（妻）からの返書がたとえおそくなったとしても、私のこの苦衷をなぐさめてくれることだろう。

＊⑥の意。［私のあれこれ思いなやむ］苦衷

㈤［史海陽李竹君六朝文絜訳注］遅れて瓊瑤を枉ぐるも、其の杼軸を慰めん。

ずいぶんおそくあなた（妻）に返書をおくるのだが、これがあなたのうつろな心をなぐさめることができればなあ。

＊［あなたの］うつろ［な心］

㈥［李伯斉何遜集校注］瓊瑤を枉ぐるを遅てば、其の杼軸を慰めんとす。

あなた（妻）が私の返書をまっているので、［この手紙をかいて］あなたをなぐさめたいとおもう。

＊③の意。あなた（妻）

というものだ。この六通りの訳文は、当該の書の解説に依拠しながら、私が日本語になおしたものである（書き下し文は、該書の解説に応じて私がつくったもの〈ただし㈠は訳文も書き下し文も、ともに岡村氏自身のもの〉。

また＊は、当該用例における「杼軸」の意味である）。

さてこの六通りの訳文、まずは「杼軸」の解釈に焦点をしぼって、検討してゆこう。「杼軸」の解釈については、おおきくいえば三通りにわけられそうだ。まず右のうち㈡と㈣とは、多少は訳語がちがっているが、おおきくいえば⑥「苦心する」の意に該当するものだろう。張仁青氏は㈡の「杼軸」対して、「思念の深きこと、杼軸の旋転（せんてん）して停（とど）まらざる如き有るを言う」と解説している。つまり、あれこれ思念するという解釈だから、⑥の意に解しているとみなしてよい。

いっぽう㈢と㈥は、ともに「あなた」と解している。ここの「あなた」とは、書簡をおくる相手をさし、つまりは蕭恭の妻ということになる。すると「杼軸」の語は、③「婦女」の意で理解しているのだろう。

問題なのは、㈠と㈤の「うつろ」（漢字をあてれば「空ろ」「虚ろ」）の意である。なぜそうした意味になるのか。岡村氏および史海陽・李竹君の両氏らは、つぎのように説明している。すなわち、この語は『詩経』小雅大東の「杼軸其空」（杼も柚もからっぽになってしまった、の意）にもとづくものである。しかしながら、ここでもさきの「瓊瑤」とおなじく、典拠の文章をヒネって利用していて、「杼軸」を織機の部品でなく、その直後の「空」（うつろ、からっぽ）の意で使用しているのだ――と。

以上の三通りが、現代の研究者の「杼軸」解釈である。では、こうした「杼軸」の解釈もふまえて、「遲枉瓊瑤、慰其杼軸」二句の訳文としては、どれが適切かをかんがえてみよう。私見によれば、右のうちでは㈠の岡村訳が、もっとも妥当な解釈をしているようだ（ただし、一部修正を要する。後述）。「杼軸」（うつろ）の解釈はもちろん、二句全体の文脈把握においても、岡村訳がふさわしいようにおもわれる。[3]

まず「杼軸」理解については、同種の「杼軸＝うつろ」の用例を補填し、私なりにこの解釈をアシストしてみ

よう。すると、たとえば呉の賀邵は「諫呉主皓疏」において、

「百姓罹杼軸之困、「老幼飢寒、
「黎民罷無已之求、「家戸菜色。

世人は物資の払底にくるしみ、民衆はやむなき請求に疲弊しています。老幼とも飢寒におびえ、どの家もあおい顔つきの者ばかりになっているのです。

とかたっている。ここの「杼軸」は「物資が払底する」、つまりうつろになるの意である。おなじく、晋の劉弘は「請詔東海王等罷兵表」において、

今「辺陲無備豫之儲、
「中華有杼軸之困。

いま辺地では蓄えがなくなり、京師でも物資が払底してしまいました。

とつづっている。ここの「杼軸」も、右とおなじく「物資が払底する［＝うつろ］」の意味だろう。詩や賦ジャンルなどの［特殊な］文学作品でなく、表疏という通常の政治的文書に使用されているのは、こうした意味や用法がかなりひろまっていたことをしめしている（その意味では、『漢語大詞典』は「杼軸」の語釈のなかに、「⑦うつろ」の項をくわえるべきであった）。何遜は過去のこうした用法を模して、この代作書簡で「うつろ」の意の「杼軸」を使用したのだろう。[4]

その他、「遅」（待ち遠しい）や「枉」（よこしてくれて）の解釈においても、岡村訳のほうがすぐれるようである。どうしてかといえば、この二句は書簡の結びの部分だが、六朝の書簡ではいっぱんに、末尾に「返事をください。まっていますよ」という文言を布置することがおおいからだ。岡村訳は、「遅」や「枉」の解釈がまさ

にそうした内容になっており、当時の書簡の結びにもっともふさわしいのである。

当時の書簡末尾の例として、たとえば蕭統の作とされる「十二月啓」をみてみよう。この作は、一年十二か月の時候に応じて、その月にふさわしい風流韻事をもりこんだ書簡の模範文例集である。そのうちの中呂四月の末尾をみてみれば、

「今因去雁、如遇回鱗、希垂玉翰。
聊寄芻蕘。」

いま、この地を旅だつ雁に託して、小生の想いをつたえます。もしよき便があれば、玉翰をたまわればさいわいです。

とあり、また蕤賓五月の末尾にも、

「聊申弊札、佇覩芳詞、希垂愈疾。
以代労人。」

つまらぬ手紙をつづって、なやめる小生のかわりといたします。あなたのご返事をおまちもうしあげ、それによって病がいえるのをねがっております。

とある。四月の末二句をていねいに訳すと、「もし回遊する魚にであえば、[それに託して私に]玉翰をたまわればさいわいです」となり、五月の末二句を直訳すると「じっとたたずんであなたのご返事をおまちし、[そのご返事を拝読し、元気になることによって]私の病がいえるのをねがっております」となる。表現はことなっているが、いずれも相手の返事をまつとのべているのがわかろう[5]。

もちろん一年十二か月の文例の末尾すべてが、こうした内容になっているわけではない。なんといっても書簡

文には、書きかたに個人差があるものだからだ。ただそうだとしても、書簡末尾の文言として、相手の返事をまつということばは、たしかにふさわしいものだろう（じっさい、そうした末尾をもった六朝書簡はおおい）。とくに右の㈢㈤㈥のごとき、「私の手紙があなたをなぐさめる」という結びよりは、ずっと適切だといってよい。その点、岡村訳はまさに「相手の返事をまつ」という内容になっており、美文書簡の結びとして適切な文言だというべきである。

ただ、こういうふうにみてきたとき、私は一か所だけ、岡村訳に異議をとなえたい箇所がある。それは、後句の「其」字の解釈だ。この字をふくむ「遅枉瓊瑤、慰其杼軸」二句を、岡村氏は「私は待ち遠しい、そなたが返書をよこしてくれて、私ばかりか、そなたの今のうつろな気持ちも慰めてくれるのが……」と訳されている。この傍点部分（「其」の訳）が、すこし具合がわるいようだ。岡村氏はおそらく、「其」を代名詞や連体詞ふうに解し、「〈其の〉とはだれか」とお考えになってこう訳されたのだろう。しかしここの「其」は、口調をととのえる（＝四字句にする）ための埋草として布置されたもので、べつに特段の意味を有するものではない。したがって、氏の訳文の「……ばかりか、そなたの今」は不要だといってよい。つまり、右の傍点部分はなくもがなであり、「私は待ち遠しい、そなたが返書をよこしてくれて、私のうつろな気持を慰めてくれるのが……」と訂正すべきだとおもうのである。

五、「杼軸」余録

以上、「杼軸」の六朝期の用例を吟味して、語義変遷の過程を追跡してきた。ほんらいは織機の部品の意にす

ぎなかった「杼軸」の語が、六朝期においては多様な意味を包含していることがわかったとおもう。

この「杼軸」にかぎらず、六朝には、この種の新意充入の語がたくさん存在している。では、こうした新意はその後、どんな運命をたどったのだろうか。それは、後代にも使用が継承されてゆけば、辞書にもその意が掲載されるようになる。だが使用されなければ、一時の例外的用法として軽視され、やがてわすれさられていった――といってよかろう。では、どうした新意が継承され、どうした新意がわすれられたのか。そしてその量やパーセントは、どれくらいだったのか。こうした疑問に対し、菲才の私などが明確な回答をできるはずもない。ただ無責任な推測をいっておけば、おそらく大多数の新意は、後代に継続して使用されることなく、軽視され、わすれられていったことだろう（注1の吉川論文も参照）。そうかんがえれば、現代の『漢語大詞典』に七つの意味をのせてもらい、また小型辞典にも「文章を組み立てる」意が掲載された「杼軸」は、新意を充入された語としては、むしろ例外的に幸運なことばだったとしてよかろう。

こうした六朝における新意、なかでも「杼軸」の意味を吟味してきた過程で、私が気づいたり確認できたりしたことが、いくつかある。本稿の趣旨とはすこしずれることもあるが、最後にそれを札記ふうにかきつけて、この稿をおえることにしよう。

第一に、「杼軸」の語に⑥「詩文をつくる」という新意を充入した陸機の着想に、あらためて感服させられたということだ。先述したように、前漢の司馬相如や『淮南子』の用例をみると、当時から機織りと創作とをリンクさせる発想じたいはあったようだ。その意味では、だれでも「杼軸」の語に、「詩文をつくる」の意を充入することができただろう。だがそうであっても、じっさいにそれをおこなった者は、陸機以前にはいなかったのである。それが陸機のすばらしいところだ。なんでもそうなのだが、これもコロンブスの卵なのであって、最初に

発案し、それを実行にうつせるひとこそ、真の天才なのである。陸機は、まさに卵の尻をつぶして卵をたてた最初のひとだったのであり、その意義はたかく評価せねばならない。

陸機は「文賦」中でしばしば、これ以外にも卓抜な新意を充入している。有名なものをあげれば、「警策」の語もそのひとつ。この語は、陸機以前では「馬のムチ」の意にすぎなかった。ところが、陸機が「文賦」で、「立片言而居要、乃一篇之警策」（ちょっとしたことばを関鍵の場所に布置すれば、それが一篇の主題をいかす語となる、の意）と使用するや、この平凡な語は、たちまち文学的な「主題をひきたたせる重要な語」という意になってしまった。そして後世の文学批評の分野では、しらぬものなき重要タームに変身してしまったのである。拙著『六朝文評価の研究』第二章でも指摘したが、陸機はとくに比喩表現を得意としており、その卓抜な比喩表現から発生した新語や新意のかずかずは、おおくが後世までつたわっているのである。

第二に、陸機ら六朝文人の新意充入には、あそびふうな動機もあったのではないだろうか。『詩経』大東の「杼柚其れ空し」句にひっかけて、「杼軸」に「詩文をつくる」や「うつろ」の意をもたせたのは、真摯な修辞意図によるものだったろうが、同時にあそびふう気分も存していたようにおもわれる。

たとえば、「うつろ」の意の「杼軸」、日本語のなかに同種のものをさがしたなら、さしずめ、薩摩守（さつまのかみ）の語をただのり（無銭乗車）の意で使用するようなものだろう。薩摩守とは平安末期の武将、平忠度（たいらのただのり）のことをいう。彼は薩摩守の官についたから、薩摩守平忠度（さつまのかみ　たいらのただのり）とよばれた。ところが後世の人びとはその呼称にひっかけて、「薩摩守」の語をただのりの意で使用したのだった。[6] いわば日本版の断語（近世以後の口語系の漢語では「歇後語」とも称する）だといってよかろう。

いっぽう、「詩文をつくる」意の「杼軸」については、私は、「文賦」の「雖杼軸於予懐、怵佗人之我先」二句

をはじめてよんだときの、陸機の友人（詩文の仲間）の顔つきを想像してしまう。すなわち、陸機から、完成したばかりの「文賦」草稿を手わたされたその友人は、「雖杼軸於予懐」句までよみすすんだとき、エッとふしぎそうな声を発したのではないか。そして首をひねりつつその前後の文章を、しばらくよみかえしていたにちがいない。やがてある瞬間、彼はとつぜん「そうか」とひとりごち、そばにいた陸機のほうにニヤッとほほえみかけた。すると、陸機もおもわず表情をくずし、「そうだよ、そういう意味だよ」というふうに、その友人にむけてそっとうなずいてみせた――。おもうに、こうした場面が、陸機の周辺で何度かあったのではないか。つまりこの「杼軸」の新意は、そうしたなぞなぞ、いやもうすこし高級な言いかたをすれば、言語遊戯ふうな効能も有していたのだろう。

かく六朝期の文人たちは、「杼軸」の語に対し、陸機は「詩文をつくる」の意をもたせ、何遜は「うつろ」の意で使用した。こうしたひねった典故利用の奥には、真摯な修辞意図と遊戯的な精神とを融合させた、いわば真戯融合（私の造語）の意図があったのではないかと、私はかんがえるのである。(7)

第三に、語彙の典拠と作者の思想との問題である。「杼軸」を例にあげれば、この語は『詩経』に典拠をもっている。だからといって、それだけの理由でもって、「陸機＝儒者」だと主張してはならぬということだ。というのは、研究者のなかには、ときどき語句の典拠を重視するあまり、語句の典拠とそのひとの思想を短絡してしまう傾向が、存しているようにおもわれるからである。たとえば、

陸機は杼軸の語をつかっている

←

杼軸は『詩経』（儒家経典）が典拠だ

←

陸機は儒者にちがいない

というふうに。

ことばの出典から作者の思想傾向をさぐっていくのは、べつにわるいことではない。たとえば一篇中に『老子』からの語彙が多用されておれば、その作が『老子』の影響下にあるとかんがえるのはとうぜんだろう。しかしそれもケースバイケースであって、あまりに機械的にかんがえてはならない。よくみると批判的に引用しているのかもしれないし、数量はすくなくても重視すべき典拠が、ほかにあるかもしれない。とおい外国の人びとが、日本の歳末に「クリスマスおめでとう」のことばがあふれているのをみて、「日本にはキリスト教信者がおおいにちがいない」と断じるようなことをしてはならないのだ。

私見によれば、六朝の文人たちは、「経書由来の語彙をつかっているから、儒者にちがいない」と断じられるほど、単純な人びとではない。当時は、三教（儒道仏）を兼修するのがふつうであり、特定の教えにこりかたまっていた文人は、むしろすくないとかんがえねばならない。斉の孔稚珪などは、『南史』本伝によると、日中は廟堂で経世に尽力しながら（儒教ふう）、夜に自宅にかえるや、「風韻清疏にして、文詠を好み、酒を飲むこと七八斗」で「世務を楽しまず」だった（道家ふう）という。このように昼と夜とで、思想がちがっているケースさえめずらしくないのである。

くわえて、彼らは三教由来の語彙を、思想のあらわれとしてでなく、文章のかざりとして利用することもすくなくなかった。『老子』の語彙をつかっていたとしても、その作者が道家思想に耽溺しているのでなく、［修辞的意図によって］文章のかざりとして使用しただけ、というケースもありえるのである。

たとえば、『文心雕龍』の作者劉勰は、儒仏の思想を兼修した人物として名だかい。ところが、彼の代表作たる『文心雕龍』序志篇の賛では、

生也有涯、無涯惟智。
逐物実難、傲岸泉石、
憑性良易。咀嚼文義。

生は有限なので、いくら人知をつくしても、きわめつくすことはできぬ。［かく人知で］この世の事物を追究するのは、まことに困難であるが、おのが性情に依拠して追究するのは、わりと簡単だ。そこで私は山水のなかに悠々と隠棲して、文学の本質をかみしめてみたのである。

という、［儒でも仏でもない］道家ふう字句をつづっている。とくに初二句は、『荘子』養生主の「吾生也有涯、而知也無涯。以有涯随無涯殆已」（わが生は限りがあるが、しることには限りがない。有限の生によって、無限のこの世の事物をしろうとしても、つかれてしまうだけだ、の意）をふまえ、人間のさかしらな「知」を批判したものだ。また五句目でも「傲岸泉石」（山水のなかに悠々と隠棲して、の意）とつづって、山水への隠棲を示唆するなど、全体的に道家思想へのつよい傾斜をみせている。

しかしじっさいのところ、劉勰はその生涯をとおして、山水に隠棲したことなど一度もなかった。寺院にすんで仏典を読誦し（最晩年は出家した）、また仕官して昭明太子につかえたことはあったが、しかし道教ふうな隠遁生活とは、まったく無縁の一生をおくった人物だった。その彼がこの賛では、なぜか道家ふうな発言をおこなっているのだ。こうした文章こそ、道家由来の語彙を、思想のあらわれとしてでなく、文章のかざりとして利用した事例だといってよかろう。[8] 六朝の詩文には、こうしたかざりとしての典故利用もおおいので、研究をこころざす者は留意せねばならない。

注

（1）六朝における新語や新意充入の語については、吉川幸次郎「六朝文学史研究への提議一則」（全集第二五巻　初出は一九七六）を参照。

（2）陸機が「文賦」をつづるさい、「杼軸」の使用をおもいついた理由として、前後の文脈との関連もあったろう。すなわち、この「雖杼軸於予懐、怵佗人之我先」二句の直前に、

　　或藻思綺合、清麗千眠。炳若縟繡、悽若繁絃。必所擬之不殊、……

　　あざやかな発想があやぎぬのようにおりなし、清麗な表現がひかりかがやく。行文の輝きは絢爛たる錦繡のごとくで、その悽愴な響きは琴糸がかなでる楽音のよう。それでも構想が斬新でなければ、……

という字句が布置されている。ここでも「綺合」「縟繡」など、機織り関連の語彙を使用しているのに注意しよう。つまり「文賦」では、二句以前から創作と機織りとを関連させて論じており、そうした経緯もあって、二句中に「杼軸」の語をつかったのだろう。

（3）岡村訳の刊行は、㈠～㈥のなかでは、もっともはやい一九六七年である。それほどはやい岡村訳が、［私見によればだが］もっとも適切な解釈をほどこしているということは、日本人としてほこってよいことだとおもう。ちなみに、「瓊瑤」や「杼軸」のごとき断語については、鈴木虎雄『駢文史序説』や孫徳謙『六朝麗指』がくわしい解説をほどこしているので、岡村氏はそうした書物に依拠したのだろうが、六七年当時では、日中ともあまりしられていなかったろう。

（4）賀邵や劉弘の表疏では「杼軸之困」とつづっているが、何遜書簡では「慰其杼軸」とし、「之困」二字をけずっている。「杼軸之困」とあったならば、「杼軸＝物資が払底する」の意を推測するのは簡単だが、「之困」をけずると、そうとう困難だったことだろう。その意味で、何遜書簡の二句の表現は、当時の文人にも難解にうつったのではあるまいか。

（5）「十二月啓」は梁の昭明太子こと蕭統の作とされるが、この作者推定には疑問がおおい。紀昀『四庫全書総目提要』巻一三七では、じっさいの作者は趙宋の文人だったろうと推測している。だがそうであっても、この作が六朝の書簡文例集

として有用であることについては、拙稿「六朝書簡文の書式について―昭明太子十二月啓を中心に―」（「中国詩文論叢」第八集　一九八九）を参照。また本文の「十二月啓」の翻訳は、拙稿「十二月啓訳注―六朝書簡論―」（「中京大学文学部紀要」第四三―一号　二〇〇八）のものによった。

（6）各種の辞書の解説によれば、狂言『薩摩守』に、渡し舟にのって「平家の公達、薩摩守忠度」といって、舟賃をふみたおそうとする僧が登場しているという。ということは、「薩摩守＝ただのり」のシャレは、かなりふるくからひろまっていたのだろう。

（7）六朝における真戯融合については、拙著『六朝の遊戯文学』第十四章を参照。

（8）劉勰が『文心雕龍』序志篇の賛で、道家ふう典故を使用したことの意図については、拙著『六朝文評価の研究』第四章でくわしく論じておいた。関心のあるかたは、同書を参照していただきたい。